
梅雨明けの頃

雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅雨明けの頃

【Nコード】

N4042M

【作者名】

雅

【あらすじ】

社会で生きていくことにつかれた中年男の元に高校の「同窓会事務局」

からの案内が届くところから物語は始まります。

基本的に奇数章は回想部分で、偶数章は物語部分となっております。

あの頃(1)

絢爛たる桜の花が咲き誇る中を、更にそれよりも誇らしげに、そして少し恥

ずかしげに高校の正門をくぐってくる新入生とその保護者達。毎年この時期に

繰り返される入学式の風景が、数ある高校生活のどのシーンよりも僕は好きだ

った。そしてこの時ほど、入学式と自分の住む地方の桜の開花時期が重なって

いる現実感謝する事はなかった。

しかし自分を省みると、どうしても自身の入学式の記憶がない。恐らくはう

らかな春の陽に迎えられるながら、式場である体育館への道のりを、少し緊張

気味の自分が歩を進めていた事は想像に難くないのだが。

人生をジグソーパズルに例えるなら、儚いまでの瑞々しさと、今にも折れそ

うな頼りなさの中で過ごす三年間が如何に重要なピースになるかを、

悲しいか

なその時を一心に過ごしていた自分たちには爪の先ほども理解していなかった。

そして今、人生も半ばを過ぎようとする頃、ほとんど埋まってしまったパズル

の中に、「あの頃」間違っではめ込んでしまったピースを見つけて苦笑いをし

ている自分がいる。しかしその頃の澄みきった双眸は、きっと純粋に未来を見

つめていたに違いない。例えそれが蠅螂の斧よろしく、大いなる無謀であって

も、世間知らずであっても。

もしかしたらその視線が決して正鵠を射るはずがないという、厳然たる事実

を少しずつ知ることが、そしてそれまでの夢想と決別し、自分の歩むべき道程

をきっちりと見据える事こそが、本当の少年からの旅立ちかもしれない。

夢を見ていた季節は遙かに流れ去り、大人の社会という化け物に

苦もなく籠

絡されていく自分を強く自覚する今となっても、「あの頃」の残像
はやはり強

烈で、痛いぐらいの切なさや懐かしさは、もう二度と戻る事が許さ
れない人生

の道標として、今も心の決して少なくない部分を占めている。

梅雨の少し前

不意に携帯電話が鳴った。

今時の若者とは違い、何かにつけて不精なため、流行歌の着メロなどは設定

していない。会社から支給されているものなので、近くの人間にかかってきた

のと間違えるのも頻繁で、早くオリジナルの着信音に変えなければと心に誓っ

て早や数カ月。

無機質極まりない呼び出し音の五回目あたりで、ようやく伸ばした指の先に

触れた携帯を覗きこむと、しばらくご無沙汰している母上の名前がそこに表示

されていた。

時は日曜日の午前10時。

何をするでもなく、休日ならではの夢うつつを貪っていた浩二は、物憂げな

気分にようやく打ち勝って通話のボタンを押した。

「はいはい」

なぜかうちの母親は、電話の第一声がいつも「もしもし」ではなく「はいはい」なのだ。

「久しぶり」

「ホンマご無沙汰やね。今の仕事終わったら帰ってこられる？」

妻を地元に残して、単身赴任をしている浩二の境遇を慮ったこの言葉も、

二人の会話の導入部としてはすでに定型句となりつつあった。

「どうやらね、社員は会社の指示にハイハイ従うだけやから。んで何？」

「ああ、あんたにハガキ来とったよ。高校の同窓会事務局やて」

「あ、そう。で、いつ？」

一応開催日時を聞いたものの、概ね浩二はこの催しに参加するつもりはなか

った。就職してから今日まで、特に大学関係においては、この手の

連絡は数限

りなくあった。しかし一度としてそれらに出席したことはない。同窓会事務局

というからには、学年全体かもしれない。高校の卒業生全体かもしれない。漠

然としたイメージではあるが、このような催しに出席する連中は、日頃からお

互いに定期的に連絡を取り合い、よって同窓会にも示し合せた上での出席が

ほとんどではないのか。つまり、それなりの出席者がいたとしても、高校時代

の友達との交流が疎遠になっている浩二にとって、有意義な同窓会になる確率

は極めて低いのである。貧しい想像力が瞬時に脳裏に描いたのは、昔を懐かし

む歓談の中から取り残され、ビールグラス片手にポツンと一人たたく自分の

姿であった。勿論これがクラスだけの同窓会なら、顔見知りばかりであり、こ

のような懸念を抱く必要はないのだが。

『同窓会事務局』という言葉聞いた途端、急速に母親からの連絡に興味を

失ってゆく自分を浩二は強く意識した。

そしてもうひとつ。

浩二にはどうしても同窓会の参加に二の足を踏ませる理由があった。

早坂敏男・・・奴には絶対に会いたくない。

早坂とは一年生の時に同じクラスになった。

特に親しかった訳ではなく、クラスが変わってから、廊下で会うと軽く目

くばせする程度の間柄だった。

その距離感が大きく変わる出来事が、あろうことか、大学受験のシーズンに

起こる。

浩二が高校三年の晩秋を迎える頃、さすがに周りの雰囲気も何となく慌ただ

しく、殺気立つほどではないにしろ、世間一般が想像する程度の受

験間近の空

気に包まれていた。

浩二はというと、特に積極的に進路に対する希望があった訳ではない。ただ

何となく周りの人のペースに合わせて勉強をし、特段現役にこだわる訳ではな

く、一浪くらいまでならいいから、大学と名の付くところに入って、将来はそ

れからゆつくり考えようと思っていた。

そんな浩二の前に振って湧いたのが推薦入試の件。

大学名を聞いても、誰も感嘆の声を上げないかわりに、眉をひそめたりする

人もいない空気のような大学で、関西圏としては学生数も少ない。ただ、昔か

ら推薦枠があるようで、特定の学部には毎年入学者が出ている。つまり一

般的な推薦入試ではなく、指定校推薦という奴なんだろう。

浩二は積極的に希望した訳ではない。しかしそういう彼の姿勢に、将来の懸

念を感じ取った担任の女性教諭が、何とか推薦の対象にもなるから、受けてみ

てはどうかと強く勧めてくれたのだった。しかし今から考えると、希望校への

入学を目指して受験勉強に励む多くの生徒から見ると、その大学は魅力には少

々乏しく、希望者が少なかったという理由も否定できない。

しかし浩二にとっては、受験勉強から早々に解放されるという事は、決して

悪い話ではなく、まして指定校推薦である為、試験が小論文と面接のみという

のが非常にありがたかった。

しかし実際には、その面接試験は峻烈を極めた。

—— あなたが当学を希望した理由は ——

—— はい、まず自由な校風である事です。そしてなにより、一般教養におけるカリキュラムの豊富さが魅力です ——

—— 他と比べて当学が自由であるという具体的理由と、他には

ないカリキ

ユラムを挙げて下さい――

――・・・・・・・・――

―― 今年の出来事の中で、あなたの一番の関心事はなんですか

―― はい、新しい内閣ができた事です――

―― では、前の鈴木内閣と今回の中曽根内閣では具体的に何が
違いますか。

そして何を期待しますか――

――・・・・・・・・――

『泰平の眠りを覚ます蒸気船』ではないけれど、受験勉強中とは
いえ、ド

ツプリと安穏生活に首まで浸っていた浩二たちにとって今回の面接
は、十分

にショッキングな出来事であった。

担当官にしてみれば、小論文と面接だけで簡単にはキャンパスを
踏ませは

しないぞ、という気概と、付焼刃の問答練習くらいは絶対に論破し
てみせる

というプライドがあったのだろう。

浩二はというと、さすがにしどろもどろな返答に陥った場面もあったもの

の、何とか面接官の追及に屈することなく試験を終える事が出来た。

しかし問題はその4日後におこる。

先述の担任より、来週にもう一度面接試験を実施する旨の連絡が大学の方

よりあった事を唐突に知らされた。それは彼女の教職生活においても極めて

異例であるのか、その表情からもさすがに当惑の色が窺えた。

そしてこのあまり前例のない出来事が、生徒の間で話題になるのと比例し

て、一方でもう一つの不穏な噂がまことしやかに広まっていた。

同じ指定校推薦を受けた中に、早川敏男という男子生徒がいたのだが、例

の面接でとうとう返答に窮してしまい、顔を真っ赤にした挙句、最後の面接

官への礼も忘れ、茫然自失の体で退室したらしい。

しかしこれだけならば彼が不合格になるだけで幕引きになるところなのだ

が、噂にはまだ続きがあった。

彼の父親はその大学が置かれている地域出身の県議であったため、面接の

結果を悲観した彼が、試験をもう一度実施してもらおうよう大学側に働きかけ

て欲しいと依頼したというのだ。それも自分の父親が県議であることを自慢

たらしく周囲にもらすというおまけまでつけて。

もともと必ずといっていいほど、自分の高校から受験する数人の中から、

1人か2人の合格が既定事実となっている指定校推薦であることを斟酌する

と、一般入試や推薦入試と比べて、面接のやり直しの影響は非常に狭い範囲

に限定される。つまり、自分の高校から受ける数人だけを再度面接試験し、

合否判定すれば良いだけの事で、他の高校の生徒には影響は出ない。

そういった考えからすると、このような優遇措置がまかり通るのも頷ける。

加えて高校生であった浩二には詳しい事は分らないが、大学への交付金や各

種の優遇措置などにおいて、教育機関に対する地元政治家の権力が絶大であ

っても決して不思議ではない。

結果、おざなり（であったかどうかは不明だが）の試験が行われ、早坂と

もう一人が合格し、浩二を含めたそれ以外の数人が不合格となった。

浩二はこの時の深い失望感を、遙か年月を経た今も、決して忘れる事が出

来ない。それは試験に不合格となってしまうた事に対してではない。もとも

とあの試験は、期せずして自分の前に転がり込んできたものであり、何の感

慨も目的意識もなく、流れに任せて受けただけだった。

浩二にとってそんな不合格よりも、遙かに衝撃を受けたのは、自

分が全く

思いもよらない？計に長けた生徒が、あまりにも身近に存在した事である。

そして狡猾や権力という言葉とは全く無縁の生活をしていた当時の浩二にと

って、この時既に早坂敏男は、唾棄すべき存在以下になり下がったのだった。

「7月24日って書いてある」

母親の声で我に返った。

小さく漏らした浩二の嘆息を知る由もなく、久々の息子とのやりとり

に心

なしか言葉は弾んでいる。

「今回は1983年の卒業生全員みたいよ」

「一応家の方に送っというて」
転勤が頻繁な仕事に従事している為、結婚後もいつ転居の必要性に迫られ

るか分らない境遇の浩二にとって、一番確実な連絡先は、やはり母親の住む

実家であるので、いちいち高校の同窓会事務局には現住所を知らせてはいない。

い。

「分ったよ。丁度車両保険の更新証書も届いてるから、一緒に送っとく」

そしていつも通りの取りとめない話をした後、切った携帯電話をデッキの

上に無造作に置き、大きく窓を開け放した浩二は、梅雨の訪れを間近に告げ

る鈍色の空を見上げた。

頭の中で暗算してみると、高校の卒業から既に27年が経過している。し

かし、月日の流れに対する僅かばかりの感慨深さは、同窓会の欠席を既定事

実としている浩二にとって、心を大きく揺さぶるほどの事ではなかった。

ただ・・・

たった今置いたばかりの携帯電話に視線を戻した浩二は、同窓会に対する

冷めた気持ちとは裏腹に、何か言葉に出来ない不思議な感覚に捉われていた。

―― 何かがどこかで繋がっているのか ――

少なくともここ十数年の間、浩二は自分の卒業した高校というものを省み

た事はなかった。それがつい先日、何気なく仕事の合間に、自分の高校を検

索サイトにかけてみると、意外にも立派なホームページが開設されているば

かりか、ウィキペディアにも掲載されていた。

あとから知ったことだが、今はほとんどの高校がホームページを開設して

いるらしい。

特別な理由があった訳ではない。当の浩二自身も、どうして自分の高校を

検索しようと思ったか、今となってはうまく説明できない。し

かし、あ

まりにも長い空白期間を経た後に、まるで磁石にでも吸い寄せられるように、

期せずして重なった二つの出来事を単なる偶然と片付けてしまうには、どう

しても浩二には抵抗があった。

あの頃(2)

「おにいちちゃん達、取りあえず中に入ってみようか」

「何があるんですか」

「飲み物ならだいたいあるよ」

「オレンジジュースもあります？」

簡素なカラーテープで外と区切られた「店」の中に歩を進めながら、浩二は

全く似合わないエプロンをした「店員」に訊ねた。

「あるけど、お勧めはコーヒーかミックスジュース」

結局、少し三人で顔を見合わせて思案した後、一人がコーヒー、二人がミッ

クスジュースを注文し、ようやく落ち着いて席に着いた。と言っても、テーブル

ルは寄せられた教室の机の上に、白いテーブルクロスがかけられているだけだ

のものだし、今座っている椅子に至っては、授業用のものがそのまま置かれて

いるだけだ。

数日前、浩二は姉から、姉が通う高校の文化祭への誘いがあった。
中学二年

生の浩二は、好奇心も手伝って、仲のいい友達に声を掛け、後に自身が通う事

になる高校の文化祭へとやって来たのだった。

高校の文化祭は、彼にとっては正に異次元空間で、まずきらびやかに飾りつ

けられたゲートをくぐったところにある金券売場で早くも心が弾んだ。

中学校の文化祭などは非常に味気ないので、その内容と言えば、文化部の

作品展示や、少しばかり心躍るのが軽音楽部の演奏くらいか。どちらにせよ、

退屈極まりない時間を過ごすばかりの催しだ。それに比べてここは、正門から

見える範囲だけでも、極彩色に彩られており、買った金券に添えられた出店り

ストを見ても、喫茶店、軽食店、甘味処と、中学ではあり得ないものばかりだ

った。勿論、金券を必要としない催しも豊富で、ゲームセンター、8ミリ映画

の上映、演劇、お化け屋敷と、決して大げさではなく、初めて高校の文化祭に

足を踏み入れた浩二達にとっては、まさしくめくるめくワンダーランドであつ

た。

そして何より新鮮だったのは、普段街中ですれ違う時は、思わず一歩引いて

しまうような強面のお兄さん達が、今日は笑顔で店の呼び込みをしたり、一方

では舞台やスクリーンで一心に演じている姿であった。そして入ったこの店で

も、一目で中学生と分かる自分達を見下すことなく暖かく迎えてくれている。

不意に大きな機械音とともに、豊潤な香りが漂ってきた。

簡単に仕切られたカウンターの奥を見ると、ドリップでコーヒーを淹れている

る横で、ジュースが勢いよく回転している。なるほど。お勧めと
いうだけあ

って、文化祭の模擬店とはいえ、出来合いのものを容器に注ぐだけ
ではなかっ

たみたいだ。

出されたミックスジュースを一口飲むと、予想に反してコクのあ
る本格的な

味がした。少々驚いて、カウンターの方を見ると、自分たちの反応
を窺っている

たのか、ジュースを洗っている途中のお姉さんと目が会った。

しばし戸惑った浩二は、左の親指と人差し指で作った○を彼女の
方に向けて

おずおずと差し出した。

それを見た彼女は浩二達三人に左腕で小さくガッツポーズをする
と、満面の

笑顔を返してくれた。

しかしたった一人、大人ぶってコーヒーを注文した友達の発した

一言を、今

も浩二は忘れる事ができない。

「にっがー！」

どちらにせよ、抜けるような青空とそよぐ秋風の中、目の前で繰り広げられ

た歓声と喧騒が、その後の浩二の進路を決定づけたのは紛れもない事実であっ

た。

この文化祭以降、浩二は自身の成績が上がるが下がるが、姉が在学しそ

して卒業したこの高校の第一志望を遂に変更する事はなかった。

入梅

不意に携帯が鳴った。

ディスプレイには見慣れない11桁の文字が羅列されている。とは言っても

不精な浩二の事、余程頻繁にやり取りする相手や、仕事関係以外は登録してい

ないので、このような事は決して珍しくない。

用心深い浩二の妻などは、非通知は言うに及ばず、登録をしていない番号で

の着信は出ないようにしている。「重要な用事があれば、留守電に録音するで

しょ」というのが彼女の言い分なのだが、浩二の場合は半数以上が登録されて

いない相手からの着信なので、そんな事をしていた日には、たちまちお客さん

や業者からの苦情が殺到するのは火を見るより明らかなのである。今は仕事を

終えて部屋の中でくつろいでいる時間ではあったが、これとて日頃のスタンス

の例外ではない。

「もしもし」

「もしもし」恐ろしく慎重な相手の声。「私、高校の時にお世話になりました

南田といいます。覚えてますか」

後から冷静に考えると、余りにも滑稽な話だが、この時まず頭に浮かんだの

は、選挙前には恒例になった某政党候補者への投票依頼ではないかということ。

確かに今年の夏には参議院選挙が予定されているが、まだ公示日の前である事

を考えると、少々というより、相当なフライングであることは否めない。しか

しにもかくにも、相手の第一声を聞いて、瞬時に浩二の頭の中を駆け巡った

のは以上のような事だった。

「あの・・・二組で一緒だった・・・」

『二組』という具体的な名前が出てきた事で、『選挙関連』とい

う第一印象

をようやく追いだした浩二の頭が、少しずつ具体的な像を結び始める。

—— ああ、同窓会か ——

長い時を超え、同窓会の案内と久しぶりの電話。その二つが密接に関連する

であろう事は容易に想像がつく。

母から実家に届いた案内状を転勤先に郵送してもらったのが10日ほど前。

出欠を返送する期限までにはまだ間があったので、ハガキは机の上に置きっ

放しになっている。

「久しぶり」と、これは浩二。

「久しぶり。元気にしてた？」お互い恐る恐る。

「まあおかげ様で」

「阪下の家に電話して、お母さんに携帯の番号教えてもらったよ。実家の番号

しか分らんかったから」

クラスが同じだった以上に、高校在学中に彼と会話をした回数は極めて多い。

しかしその時の、男性としては少し高めの、そしてなにより物おじしない勢い

のある声は、今の携帯電話を通じては、少しも感じられなかった。

人は離れている時間でも、成熟したり年老いたりする。そんな当たり前の事

が、頭では分かっている、浩二の中にある南田の声は、卒業式の日、別れ際

に交わした時のまま生き続けているのである。

「所在地がころころ変わる仕事をしてるんで、転居の通知は出していないから」

確かに結婚を機に実家を離れた際には、仕事から夫婦揃って短期間での転居

を繰り返す生活を覚悟していたものの、実際には1年を超える長いスパンでの

転勤はなかなかなく、結局その度に浩二は単身赴任での不自由な生活を強いられ

ている。

「で、今はどこいんの？」

「久留米」

「久留米って、九州の？」

福岡県に本拠地を置く会社に勤務する浩二にとって久留米は、日頃から聞き

慣れた街であるのだが、関西人にしてみれば、かつて大物アイドルがとれた九

州の地方都市くらいのイメージなのだろう。

「そう、福岡。佐賀との県境やけど」

「それは大変やな。こっち帰ってくる予定はあるんか」

『帰ってくる予定』・・・今の仕事が終わって、出身地である関西に帰る事

を言っているのか、それとも同窓会に合わせて一時帰阪する事を言っているの

か。

「まだ先の事は分らんなあ」

コンマ何秒かの逡巡の後、結局浩二は至極無難な、そしてどちら

ととれる

言葉を返した。

「じゃあ連絡は行ってると思うけど、同窓会はどうする。参加できそうか。実

はあまりに久々なもんで、欠席が多いというより、居所が掴めずに返信される

案内状がすごく多いらしい。んでな、少しでも連絡先が分かる奴には、一本釣

りで参加を呼びかけようという事になって、俺んところにも幹事から協力依頼が

来たんよ」

電話がかかってきた直後の堅苦しい言葉遣いはそこにはなく、打ち解けた地

元の言葉で話す南田の声が耳に心地よかった。

「悪いけど欠席やなあ。今遠方やし、その日は休みが取れるかどうか分らん」

後ろめたさはあった。

久留米からなら、在来線と飛行機を乗り継げば、4時間で十分帰阪できる。

仕事についても、この年齢になれば、誰にはばかる事なく、休みを取る事は十

分に可能だ。しかし長い時間を経た今となっても、「あの」出来事は、浩二の

心の中に、深く重く澱の如く棲み続けていた。

「ならさあ、取りあえず出席で葉書出して、ダメって確定した時点で幹事まで

連絡したらええよ」

「そんなことしたら、段取りしてる連中に迷惑かかるやろ」

「ええよええよ。今分らんから返信せえへんかったり、欠席で出したりしたら、

土壇場で仕事の都合がついても出て来られへんやろ」

「まあそうやけど、ホンマそれでええんか」

「幹事連中もその方が喜ぶと思うで。その代りどうしてもダメって分った時点

で必ず連絡してやってくれ」

「分った。それで高島と校倉はどうなってる」

浩二は高校三年の一年間、南田祐樹に加えて、高島裕、校倉諒と四六時中つ

るんでいた記憶がある。運動部と文化部、そして帰宅部と何の繋がりもない四

人が何故そうなったのかは思い出せない。しかし、定期試験の時など、直前ま

で何の準備もしていなかった浩二に、放課後の誰もなくなった教室で、残り

の三人が付焼刃のレクチャーをしてくれたものだ。

そういえば学校から一番近いターミナル駅の地下にあった成人映画に初めて

入ったのもこの四人だった。この有様を誰かがふと漏らし、それが風に乗って

クラス的女子にまで知れ渡ってしまうという顛末まで付いた。今にしても、彼

ら三人と過ごした日々は、自分の高校生活の縮図であると同時に、非常に濃密

な時間であった。

「その二人は今んとこ所在不明やな」

「そうか、考えたらもう27年も経ってるもんな。同じところに住んでる方が珍

しいかも知れんよなあ」

「まああいつらも、同窓生の誰とも音信不通って訳やないやろから、こんな風

に連絡がつく可能性はあるけどな」

その後浩二は、南田祐樹と取りとめない思い出話をひとしきりした後、電話

を切った。もし今回の同窓会に出席しなければ、また再び十数年も、いやもし

かしたらもう二度と、旧友達とは言葉を交える事はないかも知れないというあ

る種の寂寥感とともに。

実は浩二が就職をして間もない頃、高島裕に連絡を取ろうとした事があった。

しかし高校の時の名簿に電話をしても繋がらず、連絡を取りたい旨のハガキを

も、転居先不明で返送されてきた。あれだけの時間を共にした自分に何一つ告

げず、連絡が途絶えてしまった一件を、かつて同じ大学に通っていた友達に話

してみると、思いがけない答えが返ってきた。

—— お前にとってはそいつと過ごした時間が、今でも人生の中で貴重な思

い出かも知らんけど、相手にとってはそうでなかったかもな。若しくはもつと

大事なものが出来たんかも知れん ——

人それぞれに時間は経過してゆく。しかし時間の経過を感じる事が出来るの

は、自分自身以外にない。そして「あの頃」の思い出は、その時間を共有した

全員の心に永遠に輝き続けるものだと思て疑わなかった浩二にとって、その

言葉は深く心に響いた。

いや、信じていたのではない。そう信じていたただけなのかも知れない。

そうしていつまでも「あの頃」を後生大事に自分の心に忍ばせて、これからも

生きていこうとしていただけかも知れない。

気が付くと微かに雨だれの音がしている。

例年よりも少し遅れた梅雨の到来だ。

あの頃(3)

創立当時から我が校の象徴でもあった洋風建築の体育館が、老朽化に伴い建

て替えられることになり、自然とその中に置かれていた食堂も、工事中は校内

の余地でプレハブでの仮設営業を余儀なくされている。

そのプレハブ食道の横にある小さな空き地の昼休み。

十数人の生徒達が円形になって一昔前の青春ドラマさながらにバレーボール

に興じている。しかししかし、決定的に青春ドラマと違うのがそのルール。ミ

スをしてボールを地面に落してしまった生徒は、身に着けている物の中から、

何か一つを脱いでいくというのがそれ。

中には女生徒の姿もあるというのに、いやはやなんとも・・・。

恐らく最初は、少人数でボールをまわす程度の食後の暇潰しだったのだろう。

しかしそれを見つけて、同じクラスの生徒が徐々にその輪の中に加

わるに至り、

どのクラスにでも必ずと言っていいほど存在するいたずら好きな男子生徒がそ

んな提案をしたに違いない。

しかし言い換えると、決して度を過ぎる事のない悪ふざけや、それでも臆する

ことなくボールを追いかける女生徒の快活さが、この高校の一番の特徴であり、

魅力かも知れない。

見ると上半身は既に下着姿になっている男子生徒もちらほら。この頃になる

と、物珍しさも手伝って、小さな空き地を見下ろすように近接する校舎の窓際

には、多くのギャラリが集まり、大きな声援を送っている。

言うまでもない事だが、男子がボールを落とすと大きな非難の声。そして女

子のそれには大喝采が送られる。

しかし女生徒もなかなかしたたか。既に上着を脱ぎ、シャツとスカートにな

っていた子がミスをして、スカートに手をかけた時は、さすがに今まで囃し立

てていた周囲の連中もぼったりと静まり返ったものの、ちゃんとかに体育着

のブルマをはいていた事を確認すると、溜息と安堵の声が交錯した。

校内なんだから至極当たり前の事だが・・・

更に時間が経過し、バレーボールの輪が益々衆目の的となった頃、またまた

さっきの女生徒がアンダーハンドでボールの処理をミスした。

しばし考え込む彼女。

周囲からは「ぬーげ、ぬーげ」の大合唱。

周りの視線を一手に集めて、シャツの袖口のボタンに手をかけた彼女は、す

かさず両袖をめくり上げ、ぺろっと舌をだした。

周囲からは一斉に大きなブーイング。しかしそれも、屈託のない彼女の仕草

の前では長続きせず、再び始まったバレーボールの喧騒の中に消えてゆく。

おしげもなく晒された彼女の小麦色の肌

流れる汗に構う事なくボールを追いかける生徒たち

その一挙手一投足に声援やヤジを飛ばす観衆

初夏の日差しを余すことなく受け止めた高校の昼下がりに

思えばまだまだ人生の黎明期とも言えるあの頃に、あまりにも陳腐な表現が

敢えて許されるとするのなら、間違いなくそこには「青春の1ページ」が存在し

た。

梅雨末期

不意に携帯電話が鳴った

外は相変わらずの雨。

今年の梅雨はどうやら陽性みたいで、既に九州南部では相当の被害が出てい

る。浩二は陰鬱な窓の外を眺めながら電話を手を取った。

「ああ、オレオレ」

天気とは正反対の、底抜けに明るい声が浩二の耳に飛び込んできた。

南田だ。

一度話してしまえば、かつての旧友の前では、長いブランクもな

いに等しい。

「んでどうよ、来れそうか」

「その前に、今の切り出しは十中八九オレオレ詐欺だろうよ。今ど

き年寄りも

振り込まんぞ」

「前にちゃんと話したんだから、着信の時俺の名前が出てるだろう

が」

出ていない。

表示されたのは11桁の数字のみ。ここにまたしても浩二は、不精を露呈す

るはめになった。

「すまん。登録忘れてたわ」

「まあええけど。んで同窓会の方は？」

「この業界、土曜と祝日は平日みたいなもんやから。でも一応お前の言う通り、

出席の返信だけはしといた。これで行かれへんかったら幹事に迷惑かけるやろ

けどな」

「まあそんな時はそんな時や。俺が言うのもなんやけど、この久しぶりの同窓会を

企画した時点で、やつらも相当の苦労は覚悟してるやろ」

確かに高校生の時とは違い、恐らく同級生は千差万別の条件下で、その日の

生活を営んでいるに違いない。

浩二のように、仕事の面や会場までの距離は問題に値しないが、胸に深く沈

むわだかまりがどうしても二の足を踏ませる者。

懐かしい友人に会いたくても、仕事の立場上、どうしても時間の都合はつか

ない者。

逆に、時間の都合はつくが、遠方からの運賃と、当日の会費が切実な問題で

ある者。

そして時間も経済的な問題もないが、元々同窓会そのものに全く興味がない

者。

それを思うと、二十数年前の出来事を未だ心の闇に沈め、度重なるかつての

級友からの電話にも、うわべを取り繕ったやり取りしか出来ない自分に強い嫌

悪感を抱くとともに、それでも尚且つ、何故か晴れて出席を表明できない、掴

みどころのない苛立ちを浩二は感じていた。

「実は俺もな、阪やんが来んと一人だけ浮く可能性があるからな。せっかく卒

業以来の同窓会やのに、ポツンと一人ってのは勘弁して欲しいしな」

なんだ、こいつも俺と同じクチか。

少しだけ心が軽くなったのもつかの間、浩二はその浮揚しかけた気持ちで自

ら戒めた。

俺はもう一つの大きな惑いを抱えている。しかもそれは、長い間心の奥深く

閉じ込められていた魔物を、期せずしてたった一枚のハガキが、ものの見事に

パンドラの箱を開けてしまったようなもので、今の自分には鎮める手だては全

く思いつかない。

「この次はないかも知れんから、出来るんなら少々無理をしても出てこいや」

浩二の掴みどころのない思いとは裏腹に、南田は明るく告げると電話を切っ

た。

雨は降り続いていた。

不思議なもので、自分の鬱々とした心を、余すことなく表現したようなこの

雨空は、不思議と浩二を落ち着かせた。一定のリズムを刻む雨だれも、近くを

通るダンプカーがはね上げる水しぶきの音も、何故か浩二には心地よかった。

自分の気持ちを嘲笑するかのような、抜けるような青空はまっぴらだ。

出来る事ならこの雨が、自分の行き場のない苛立ちや陰鬱な気持ちを、全て

洗い流してくれないだろうか、浩二は心の底で願っていた。

あの頃（４）

あちこちから薄ベニヤを切るのこぎりや、釘を打つ金づちの音が響いている。

浩二は両手に木材の切れっぱしを抱えながら、校舎の階段を慎重に降りてい

った。

ふと通りかかった教室を覗くと、女生徒がつやつやと光沢のあるサテンの生

地に、ハサミを入れたり針を通したりと、獅子奮迅の活躍をしている。

―― やっぱりこういう仕事って、男は全然役に立たないんだな

――

普段は感じない彼女達の頼もしさと、男のだらしなさにほくそ笑みながら、

一階の下駄箱の前で、つかっけからスニーカーに履き替えた浩二は、少し涼し

くなりすぎた夕暮れの秋風に吹かれて、校舎の端に指定された残材置き場に向

かった。

校内は明日から始まる文化祭を控えて、その準備の真っ只中で、心地よい喧

騒に包まれていた。遠く聞こえてくる微かな音楽は、恐らく演劇か何かで使わ

れる効果音ではないだろうか。

『残材置場』と書かれた手書きのプレートの前には、早くも木材の切れっぱ

しや、演劇で使う衣裳の残った生地、はたまた装飾用のモールや壁紙が所狭し

と置かれており、いやが上にも文化祭が間近に迫っている事を物語っている。

浩二のクラスは出し物を決める際に、すったもんだした末に、『ゲームセン

ター』に落ち着き、スマートボール、輪投げ、コリントゲーム、そしてダーツ

を手作りで製作し、無料で遊戯出来る催しとした。色々なイベントを回したか

った浩二にとっては、時間を取られる演劇などの出し物よりも余程都合がよか

った。

そしてそれは、教室内での準備作業もほぼ終わり、残った材料を置き場に下

ろし、教室に帰ろうと振り向いた浩二の目に、余りにも唐突に飛び込んできた。

早い秋の夕暮れの中、準備の為に下校時間が延長された校舎は、もう既に微

かな赤みを残すだけの暗闇を背景に、全ての教室がまるで不夜城のように煌々

と光り輝いていたのである。

その刹那、感じた打ち震えんばかりの感動を、ただただ深く胸に留めようと、

浩二はしばし息を止め、校舎の方だけを見つめていた。

たった今、ほとんどの生徒が明日からの文化祭の為に心血を注いでいる。

その象徴が目前に広がっている暗闇の中に浮かび上がった教室の灯りだ。

二年の月日を隔てて、浩二はこの時鮮明に思い出した。

「あの時」憧れた文化祭が、間もなく始まろうとしている。

盛夏

佳織が窓を大きく開け放した途端、遠く微かに聞こえていた蝉の鳴き声が部

屋中に響き渡った。

まだ時刻は九時を過ぎたばかりなのに、強い日差しは夏を謳歌する動植物達

を、いやが上にも活発にさせる。

「で、同窓会行くの？」

「いや・・・行かない」

「そう」

浩二の妻は普段から、夫の交友関係に対して全くと言っていいほど無関心で、

今回も幾度か久しぶりの同窓会がある事を転勤先から電話で話したものの、そ

の話題に対する妻の食いつきは皆無であった。

浩二にとっては、行かない理由を根掘り葉掘り問い質されるより、余程心情

的には楽なのだが、いつもの事とはいえ、少々拍子抜けの感が否めないのも事

実だった。

「同窓会に行くから帰って来たんやと思ってた」

「いや、ここんどこ仕事があんまり忙しいから」

浩二は洗濯物をベランダに干しながら無関心に話す妻の背中に言葉を返した。

昨日金曜日の夕方、仕事が終わってから浩二は、眩暈するほどの激しい逡巡

の末、一路福岡空港から機上の人となった。直前の電話一本で帰阪を知った妻

は、少々驚いたものの、元々先のスケジュールが読めない業界に何年も身を置

いている事もあるって、特段不思議には思わなかったようだ。

しかし普通に考えると、同窓会の前日に遙々遠方より帰って来たのだから、

『出席の意思あり』と取るのが自然だろう。

—— 同窓会に行くから帰って来たんやと思ってた ——

—— そうだ、行かないのなら何故俺は帰ってきた ——

昨日遅く、家に辿り着いた時から、繰り返し煩悶して来た事だ。

遙か二十数年前に封印されたはずの心の闇は、長い年月を経て今解き放たれ、

浩二の心を捉えて離そうとはしなかった。

確かに南田の度重なる誘いは、僥倖であることには違いない。しかしそれは

あくまでも、会場で一人疎外感を味わうかも知れないという一つの懸念材料が

杞憂に終わったただけであり、今となってはそれも、砂粒のように瑣末な事のよ

うに思えてならない。

あの時自分と同じくしてあの大学を受け、そして不合格になった連中はどう

しているだろうか。もしかしたら、当時の記憶も薄れ、何のわだかまりもなく、

今日は会場に向かうのだろうか。では何故自分ばかりが過去のたった一点に捉

われ、抜けだす事の出来ない迷宮を彷徨っているのか。

益々勢いを増した蝉時雨も、今の浩二の耳には届かなかった。

「そんな噂を真に受けるなんて、信じられないねえ」

唐突な佳織の言葉で浩二は我に返った。

佳織の視線の先にあるテレビでは、ワールドニュースを伝えており、それに

よると、先週某発展途上国で皆既月食が見られたらしいのだが、ある海辺の小

さな町では、『月食が始まると大津波がやって来る』という噂が流れたらしい。

町の住人は月食の時間に合わせて、高台へと避難したものの、当然ながら待て

ど暮らせど津波はやってこない。そこで恐る恐る町に帰ってみると、特に大き

な家々は何者かが侵入し、金品を残らず持ち去られた後だったと言

うのがその

ニュースの顛末。

犯人が意図してあらぬ噂を流布したかどうかは、そこでは語られていなかった

たものの、町の住人が揃いも揃って、そんな非科学的な噂を信じてしまった事

に佳織は呆れているのだ。

確かにもたらされる情報量が圧倒的に少ない発展途上国などは、月や太陽な

どに対して、一種の畏怖の念を抱く傾向にあるかも知れない。しかしそれとは

別に、浩二は佳織のその言葉に何か強い引っかかりを覚えた。

うまく口では説明出来ないが、何か今まで曖昧模糊として、霧の彼方に姿さ

え全く見えなかったものが、ようやくおぼろげな輪郭を捉えたような。

—— そんな噂を真に受けるなんて ——

—— 噂 噂 噂 ——

浩二は眼を見開いた。

そしてたった今、これまで煩悶したり、逡巡したりしていた理由をはっきり

と悟った。

これまでの早坂敏男への憎悪は、噂という非常に頼りないものの上に立つ楼

閣であつた。それをあたかも、全く疑う余地のない事実と捉えていたのだ。

いや違う！

18歳の自分が、今と比べて如何に精神的に幼くても、不確実極まりないそ

んな噂を鵜呑みにするほど愚かではなかつた筈だ。

携帯電話やインターネットの普及が皆無で、自分たちの前に浮遊する情報量

が圧倒的に少なかった時代。だからこそ逆に、発信源の分らない、不穏な情報

には今の高校生達より余程敏感であつた筈だ。

では何故あんな噂を信じた！

しかしその答えはすでに浩二の胸にあつた。

きっと自分が早坂に抱いていたものは、憎悪なんかではなく、嫉妬の念だっ

たのではないだろうか。自分自身がどれほど努力しようと決して持ち得ない絶

対的な権力を持つ者が身近にいる彼に対する嫉妬こそが、この心の闇の正体で

はないのか。

元々強く志望した大学ではなかった。結果を知らされた時も、不合格になっ

たこの事自体には何の落胆もなかった。しかし、あの時の自分は不合格の『理

由付け』が欲しかったのだ。そしてそんな自分の前に転がっていた『噂』は格

好の材料だったに違いない。

—— そんな噂を真に受けるなんて ——

そうだ、真に受けてなんかいない。

それに縋っただけだ。

自分のプライドを汚す事無く、不合格という事実を受け入れる為に、彼をス

ケープゴートにしたに過ぎない。それも敢えて望んではない大学
の不合格を

受け入れるという自己満足だけの為に。そして恐ろしく不確実な噂
である事を

知悉しながら、さもそれが最早疑いようなない既定事実として心に
封印してし

まったのも、他ならぬ自分自身なのだ。

深い眩暈から少しずつ覚醒するように、閉ざされていた浩二の視
界が徐々に

色を伴って拡がりつつあった。

今となっては、噂の真偽などどうでもよかった。

それよりも、自己憐憫の権化とも言える今までの自分と決別する
代償は、こ

れから少しばかりの自己嫌悪と付き合っていかなければならない事
だろうか。

それを思うと、浩二は心の中で苦笑いをした。

気付くとテレビが正午のニュースの始まりを告げている。

「俺、同窓会行ってくるわ」

浩二に背を向けて既に昼食の準備に取り掛かっていた佳織の背中に言った。

「うん。気を付けて行っておいで」

振り向いて言葉を返した佳織の驚くほど穏やかな表情は、浩二の背中を強く

押してくれた。

「でも余ったお昼ごはん、どうしてくれるの？」

肉体が老いるのを怖いと思った事はない。

しかし、共に駆け抜けたあの時期を、思いだす度に感じる痛いほどの懐かし

さや、二度と戻らない日々に対する惜別の情すらも、いつかは微塵も感じなく

なってしまう心の老いほど大きな恐怖はない。

ただ時間の経過の前では人は余りにも無力で、それに抗う術もな

く、峻烈な

記憶は無残にも奈落に葬り去られる。

しかし今の浩二の脳裏には鮮明に「あの頃」が蘇っていた。

今だから南田祐樹に、高島裕に、校倉諒に会いに行こう。

入学式の桜の道を、共に歩いた仲間に出会に行こう。

初夏の日差しの中、一心にボールを追った仲間に出会に行こう。

暗闇の中に浮き上がる不夜城のような校舎で、遅くまで文化祭の準備に励ん

だ仲間に出会に行こう。

そして、共に青春の蹉跎を乗り越え、その後に自分の知らないたくさんの喜

びや悲しみを経験したであろう仲間に出会に行こう。

佳織が急いで用意してくれた、夏物の背広に腕を通し、浩二はゆつくり玄関

の扉を開けた。

降り注ぐ蟬時雨と、遠くの入道雲は、紛れもなくこの地方に盛夏

の到来を告

げていた。

――完――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4042m/>

梅雨明けの頃

2010年10月8日13時56分発行